

ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第124号 (2016年9月)

風に吹かれて (102)

白井啓治

・もう少し実を成すからと秋空にトマトの紅く

先日のこと、縄文時代は作られた幻想と言う記事を目にした。縄文式や弥生式は時代の括りではなく文化の括りであり、時代として区分するものではないというものであった。世界史に共通する時代の区分からすると縄文も弥生(二部を除き)も石器時代なのだそう。

縄文時代、弥生時代の区分は戦後に生まれた日本の独自なもので、天孫降臨などの神話に基づく歴史観を改めるべく導入された時代区分なのだそう。世界史における時代区分は、石器時代、青銅器時代、鉄器時代という括りになるのだそう。

縄文時代、弥生時代の時代区分が定着してきたのは実に1950年後半であるというのだから驚きである。生活様式も縄文時代は狩猟・採集で生産力は低く貧しかったとされているが、実は農作物の栽培も行われており、籠や漆を塗った椀なども使われていたのだそう。

縄文時代を語る時「縄文時代は貧しく厳しい生活であったが貧富に格差はなく平等な社会だった」というのは、どうやらある側面だけをとらえて独り歩きた幻想のようである。

この会報にも、何度か書いたが、歴史というものは、ある一側面だけをとりあげて、そこに愚かな尺度を当てて優劣を語ったり自慢したりするものではない。ましてや歴史は時の権力者が書くもの、の例えの如く自分にとつて都合よく、心地よいものに加工して語るものではない。

歴史とは、どんな時代にあっても過度に美化して考えてはならないものであるが、吾が石岡においても歴史の里と称して、一面だけを取り上げ、優劣の尺度などを当て自慢しようとする傾向が強いが、このことは厳に戒めなければいけないであろう。

101歳のジャーナリスト、むのたけじ氏が亡くなった。大戦中新聞記者であったむの氏は、戦地の取材などで、真実を伝えることができなかったことの反省に、故郷の秋田に戻り、週刊新聞「たいまつ」を創刊し、反戦、平和、民主主義を守るための発信を続けてきた偉人である。

当ふるさと風も、むの氏には到底及ぶものではないが、自分の発言を発信するふるさと紙でありたいと願っている。

どのような状況であっても、自分を発言することを止めてはいけないし、発言することを忘れてはいけない。そして、発言は出来るだけ広く発信

することが望まれる。

私達は、何かの発言を認めたら、意欲と知恵を以てその発言に耳をかし、確り聞くことが重要である。このこと忘れたりを止めてしまつては希望の発展はないと断言できる。

閉塞する社会は、何かの発言を認めると先ず拒否することから始まり、次に否定しようとする。そして、その発言をなかったものとして、ごみ箱に捨てて見なかったことに知らなかったことにしようとする。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会も11年目に入りました。

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

発言に対する拒否や否定は、閉塞社会の特徴であるが、その元凶の一面には、まず左右をみてその反応を窺い、当てる必要のない尺度を当てる事が挙げられる。しかも困ったことに本来あり得ない尺度をあてることである。例えば、昔からそうしてきた、というのは尺度ではないのであるが、それが尺度だと思ひ込んでいえると言え。発言に対しては己の発言を持ってしか対峙することができないのであるが、己の発言を捨てて尺度を振り回そうとする。

一つの発言を認めたら、先ずは尺度することなどを捨てて、その発言を面白がる。そして愉快することであろう。論理が些か短絡するが、一つの発言に愉快を創れたら、同意でも反論でも自分の発言を与えることである。

言葉をもって意思を交わし合うのが人類という生物でなのだから、言葉の交わし合いを捨ててしまったら、人類は遠からず絶滅するであろう。

屯田兵制度

打田昇三

「ふるさと風」の第二百二十三号（八月）で白井啓治さんが落語家による石岡公演実現の記事を書かれた。大都会？に住んでいると落語家の高座など正月のテレビ番組（寄席中継）でお目に掛かるぐらいであるが私は幸運にも今回の公演を「かぶりつき」で鑑賞することが出来た。それも偶然からである。公演前日に自転車で木村さんのお店【石岡そだち】の前を通りかかり、白井さんを見掛けて「石岡寄席」のことを知ったのである。

出演された林家とんでん平師匠は文字通りに北海道の出身だとか、勿論、「屯田兵」から付けた芸名であろうけれども、明治七年（一八七四）六月に国土防衛（対ロシア）の目的で創設された此の制度も、現代の人々には忘れ去られている。屯田兵制度の創始者は政治家（薩摩藩士）黒田清隆とされる。函館戦争の参謀から北海道開拓次官・長官、参議、内閣顧問、農商務大臣、通信大臣、枢密院議長、内閣総理大臣を歴任した人物である。

其れ以前の日本は徳川幕府がロシアの脅威（東侵作戦）に晒されていたと言われる。本気で攻めて来られたら一溜まりも無いのである。明治維新で政権を得た新政府は最優先の策として北海道の防備を考え、ロシアとの間に千島・樺太の交換条約を結ぶと共に「北海道の開拓と防衛」を念頭に「屯田兵制度」を導入推進したのである。

「屯田」とは古代中国の諸王朝で行われた土地制度の一種（主として軍事食糧の確保策）であり戦争が無い時には兵士が自給自足で農業に従事するものである。此の制度を取り入れた明治政府は奥羽諸藩から応募（召集）した一八九戸・九六五人を明治八年一月に札幌郊外へ入植させた。

此の人達は黒田清隆が面倒をみたのであろうが出世の為には中央政界に戻らなくてはならないから、永山武四郎という人物が黒田の後を継がされることになり、明治四年に陸軍大尉として北海道へ行かされたのである。以後は此の人が屯田兵の受け入れと統率に専念して明治十四年には准大佐（屯田兵の士官は明治三十六年まで「准」がつけられていた）明治十八年には陸軍少将に進み初代の屯田兵本部長・第七師団長になったと言う。

屯田兵は名前のとおり「田園に屯（たむろ）する

兵士」であるから考えただけでも大変な苦勞があったと思う。やがて屯田兵制度は明治二十九年に廃止され第七師団が置かれたのである。

私は北海道には行ったことが無い。島松に六十年来の友人が居るので一度は訪問しなければ……と思ひながらつい石岡に埋もれている。今回は白井さん・木村さんのご尽力で、とんでん平師匠の高座を拝観したから「今度こそ！」と思つていた矢先に北海道から訃報が届いた。亡くなった友人は埼玉県出身なのだが昭和二十九年の大移動で組織ごと北海道へ行かされたのである。

私は茨城屯田組で土浦に來たから定年後は石岡に住むことが出来たのであり、途中で北海道が富士山麓に飛ばされる話も出たが評判が悪かったので受け入れ先が無く此の地に留まる事が出来た。人間、褒められることだけが好運とは限らない。それは兎も角、北海道では屯田兵の制度がうまく作用したようであるが、明治維新で尊王攘夷・倒幕の旗を掲げた諸藩は兵力確保に農民を取り込むことに苦心したらしい。当然のことだが、やがて大日本帝国は徴兵制度で誰彼の区別なく軍隊に放り込み、無謀な戦争を引き起こすことになる。

車に乗れない

菅原茂美

日頃、何の抵抗感もなく、自由に乗り回していた自分の車に、急に乗れなくなつてしまった。こんな不自由は真に苦痛。自由奔放に行動していたのに、一歩も動けない。想像を超えた、私にとつて、正に激甚災害そのものである。女房に蒸発さ

れた、その次くらいに超不便である。

さて車に乗れないその理由は、免停でもなく、事故や盗難や、車の所有権を失ったのでもない。

今回私が遭遇したその理由とは、なんと、「抗がん剤投与中」に、突然右目が見えなくなってしまう。例えば片目でも運転できない事はなさそうであるが、平衡感覚がまるで不安定。足元がふらつき、階段など踏み外しそうである。抗がん剤投与の理由は、去年暮れ毎日の髭剃り中、顎下腺が僅かに腫れ出し、筑波大で見てもらったら、なんと「悪性リンパ腫」という液性腫瘍で、放つといったら、数年と命が持たない「血液のがん」なのだという。触ってみても、痛くも痒くもない。普通なら放つところ。幸い娘が内科専門医なので、ピンときて早速手配してくれたので、命は助かった。エライ疫病菌に取りつかれたもんだ。

今年1月から、月1で、6〜8クルの計画で抗がん剤を投与し、このがんを叩き潰すスケジュールでスタートしたところ、わずか3か月投与したところで突然、右目が見えなくなってしまう。現在その原因について、探索中であるが、消去法であらゆる可能性を消していっているが、なかなかこれという原因が見つからない。しかしあまり長くてこずいていたら、がんが原因なら手遅れの可能性もある。もしがん細胞によるものなら、頭蓋空内へ抗がん剤を注入する事はできないらしい。そこで頭蓋空内の視神経束の周りの神経鞘に炎症がある事は分かっているの、入院して放射線治療で左目を守るという事になった。いくらピンポイント照射でも放射線により、認知症へ移行する可能性は予告されているが、それならそれなりの生き方をすればよい。この会報にものを書く事が

私の生き甲斐であるが、変な事を書くようになってから（今でもかなり変ではあるが）、会員先輩方の点検を得て、潔く手を引く。

さて、片方の眼が見えなくとも、訓練すれば、車の運転はできない事はないだろう。片目でも、普通車ならば、視野150度、視力0.7で運転免許は、許可されている。しかし、ハンドルに未練はあるが、事故を起こし、他人に傷をつけてからでは、間に合わない。いずれそう遠くないうちに、未練は残るが、運転停止を決断する。

さりとて石岡から筑波大まで、タクシーは片道8000円。妻は運転をしないし、同居する長男夫婦は、献身的にサポートしてくれるが、それぞれ働き盛りで、そうやすやす休暇も取りづらい。土日に出勤して私の診察日に運転をしてくれているが、大変な負担となっている。車の運転ができないのならば、バス・電車を利用すればよいように思うが、抗がん剤のため白血球が減少。免疫機能が極度に低下しているので、人込みの中は感染しやすく、とても危険。ドクターストップである。簡単に肺炎など引き起こす可能性があるからである。見るに見かねて近所の方が、車を出してくださっている。こんな時の近所の方のご厚情には、本当に頭が下がる。

私はこれまで、環境保全のため、できるだけ車には乗るな！などと度々主張を繰り返してきた。文明の高度化のために、エネルギーの乱用は環境の汚染などに拍車をかける。CO2削減のためには、世界の大手自動車メーカーまでもが、偽装工作をするなど戦々恐々である。そして現在、各メーカーは、車の車種をハイブリッドや電気自動車などにシフトする傾向にある。

これまで私は、『現在の地球は未来の子孫からの預かりもの』という言葉は何度も紹介してきた。自然環境にしろ、資源にしろ、今の時代の人々が使い放題・勝手に浪費してよいものではない。預かりものなのだから、当然未来の子孫たちにも平等に使用する権利がある。それを現代人が、俺の時代に好きなように使い尽くし、今の今、俺達が便利で豊かに暮らせればそれでよい。未来の事など知るもんか。これでは、「知恵ある人」という意味の「ホモ・サピエンス」が泣く。知恵ある人なら、千年・万年先までしっかり考えるべきである。

＊

さて話は飛ぶが、人類はこのまま人口を増やし続けられ、今世紀末頃には100億人を突破しそうである。地球の人口収容能力50億人の丁度倍である。4人家族の家庭が突然8人になったら、例えばちよつとくらい建て増しをしても、それはかなり穏やかではなくなるだろう。しかし見え見えの危機が間近かに迫っているのに、今、国連は何をやっているだろうか？ 歴史上、巨大な数に膨らんだ動物は、大方滅亡していくのが鉄則みたいである。

人口削減について、最も能動的に動くべき国連が、だんまり黙助を決め込んでおり、なんとわが国では、少子化担当とやらの大臣を置き、必死になって人口を増やそうとしている。人口を増やす事より、大都市集中化の歪な現象を修正するほうが先であろう。日本列島の人口密度を平均化するほうが先決問題である。

いずれ我が国も大量に移民を受け入れざるを得ないと思う。世界の圧力で受け入れ拒否はできなくなるはず。そうすれば当然、彼らの福利厚生や教育・生活水準保障など、多くの面倒を見なければ

ばならない。それを覚悟でなおも人口増加に拍車をかけるといのであろうか？ それは地方のさびれるのを防ごうとする姑息手段だ。大都會での産業拡大の傾向は固く禁止し、それは地方に移し、教育も文化も地方で発展するように導くのが本當の政治であろう。道州制導入など、政治・経済・文化の軸足を地方に移すべきである。若者が生まれ故郷を捨てたい理由がない。教育や文化がしつかり充実し、地方に根を下ろしていれば、若者は必ずそれに強く結びついていくだろう。都會で働き、定年を迎えた熟年は、故郷に帰り、家庭菜園などを楽しみながら、余生を過ごす人達が近年多数みられる。故郷とは、おふくろの『子袋』と同義であり、カンガルーの子袋はこの世で、こんな安全な所はない。安全であつたからこそ、今日の健全な自分が存在できたのである。

*

所で人類は文明開発のスピードを、あまりにも急ぎ過ぎはしませんか？ といつも思う。特許特許の先陣争い。そしてそれ侵害だ!! とか言って提訴合戦。中国では「青森りんご・こしひかり」・「松坂牛」とやらが昔からあり、「新幹線」は中国で開発したものだという。今それを世界に売り出そうと躍起になっている。そして世界は、交通機関のスピード競争に余念がない。

英仏共同開発のコンコルドは、燃費・騒音・飛行距離などあまりにも異常であり、1969年、初飛行から2003年の製造停止までわずか20機のみであつた。マッハ2は旅客機としては驚異的早さではあるが、超高度まですぐ上昇しても、航続距離は短く、空中給油がなければ、遠距離は飛べない。勿論太平洋横断ができない。しかも客

席はわずか100名のみ。人類はこれだけの『怪鳥』が必要であつたのか？ 事故もあり、超高額などでキャンセルが続き、さすがのマッハ2も時代の要求する形ではなかったらしい。それでもさすがは産業革命を成し遂げた工業先進国。時代のニーズを読み、地球環境のあるべき姿を読む良識があつたと見えて、正々堂々と名誉ある撤退を敢行したのには、敬意を表する。

*

次は宇宙開発である。地球を取り巻く宇宙空間には、今どれほどの人工衛星やら、その運搬機や燃えカスやらが散在している事やら。無数のゴミの中を、本来の衛星が潜り抜けるように飛んでいるのだという。確かに現在人工衛星による観測により、気象関係など詳しく観測され、台風の進路など、昔は想像もつかないほどの精密な予報ができるようになった。お陰で諸々の行事予定など、実に多くの恩恵を受けている。しかも長期予報も可能であり、農業をはじめ、いろいろな業種にわたり、多くの恩恵をもたらしている。

更には、航空機や船の航海など、そして地図作成や、カーナビなど、座標上のGPS機能は、どれほど役立っているかしかない。更に認知症徘徊者に端末をつけておけば、搜索も簡単である。人間が何もかにも機械に監視され、その行動をすべて掌握されるなど、我慢ならない事ではあるが、人間の尊厳性は保持したうえで、有効利用するなら、大いに活用すべきことであろう。

しかし、報道によれば、運搬したロケットやその破片など無数に飛び交い、そのスピードは、まるで弾丸のようでもあり、有人・無人の貴重な衛星にいつ飛び込んでくるかわからない。ならば

まず、一機人工衛星を打ち上げたなら、自己責任において、不要のものはまず何とかして始末をつけた後でなければ、次の打ち上げは罷りならぬ：と国際決議しておかないことには、トイレのない新築住宅増設みたいで、秩序がなっていない。とにかく、いずれ破片は地球の引力により引き込まれ、大方燃え尽きるはずであるが、一部燃え尽きないものは地上まで落下するので、危険この上ない。知恵を絞って、危険なものは除去した後でなければ次回打ち上げは控えるべきである。

*

さて次に、リニア新幹線はどうであろうか。運用開始を前倒しとか報道されているが、速さ世界一に挑戦するチャレンジ精神そのものは、一概に悪いとはいわないが、現在、世界一の借金大国日本が、急いで成し遂げなければならない緊急事業なのであろうか。観光の目玉として世界の客を呼ぶのにはもってこいかもしれないが、果たしてそのほとんどをトンネル内と来ては、客は何を見て喜ぶのか。私もかなりのヤジウマなので、この命あるうちに一度は乗ってみたい気持ちは山々。心が揺れ動く。

そこで私の妄想であるが、報道によれば活断層のない茨城県こそ、政府機能の移転先として絶好ではないか。東京に直下型地震が大正12年に起きたという事は、間もなく100年である。いつ再び起きないとは限らない。今のうちに地方へ移転できるものは、さっさと移動すべきではなからうか。手前味噌で恐縮だが、山が少なく、耕地面積率日

本一の本県こそ、平坦な大地を満遍なく利用できる立地条件である。ご存知この『常盤国』は、奈良・平安時代、日本一豊かな「国」であった。現在の東北6県と一國で同等であったといわれる。平地が多く温暖な気候で、山海の幸に恵まれ、絹織物こそ宝物である。さてそうすると、一番先に目をつけて、常陸国を支配下に置こうとするのは、天皇である。やたら子供を多数生み、その子供達に生きる道を確保するため、「親王任国」として、まず第一に『常陸国』を掌握する。勿論、親王自身は、現地赴任はしないが、誰か役人（大掾家など中級官僚）を現地に派遣し、租税のみ吸収するシステムである。そして、常陸の国は奈良時代末期・桓武天皇から4代目、鎮守府將軍・常陸大掾・「国香」以降が治めるところとなる。さてそういう常陸国の現状は、首都東京の羽田・成田空港が満杯状態なので、第3空港として、現、百里基地及び茨城空港を完全民営化し、東京までリニア線で直結する。都心まで羽田・成田と距離はそんなに変わらない。地価もはるかに安い。首都機能を、現、筑波山麓あたりに移転すれば、空港まではすぐである。存分に検討してみる価値があると思う。

*

さて最後は車に関する恐怖の体験談。1997年私は、JICAの国際協力事業の一環として、中米ホンジュラス国で、国民の栄養改善を目的に、「養豚開発プロジェクト」に参画した。仕事の内容は、同国の養豚実態を調べ、改良品種の導入にあたり、すでに国内の豚に、どんな伝染病が存在するかを調査し、その傾向に従い、改良品種普及の方針を決める。汚染地帯ならどんな改良品種を導入しても、水泡に帰する。

身分は農林水産省推薦で、政府（外務省囑託）派遣の外交官待遇。バスボートは外交官用で、ほとんどの空港はフリーパス。任地は治安と衛生の極めて悪い地帯なので、命の保証は極めて難しい。それゆえか、飛行機は往復ビジネスクラス又はファーストクラスの乗り継ぎ。現地についてみたら、なるほど噂通り、その辺のアンチャンが普通に短銃を持っている。ソ連が崩壊し、キューバを通じ、カリブ海沿岸諸国にソ連製の銃器が広くいきわたったのだという。ある日、通訳とともに居酒屋に入った壁に弾痕がある。これどうしたの？と聞いたたら、店主は平気な顔して、こないだ客同士が、ケンカになり、撃ち合いをやったんだ…とすました顔。アメリカの西部劇時代さながら。新聞には毎日、生々しい殺人事件の写真が載っている。給料・物価は日本の約40分の1。トロピカルフルーツの美味しさは、言葉に表せないほど。しかし、子豚は大蛇（ボア）に飲まれるし…。

私の仕事は、農村周りで豚の採血・検査。同国では、熱帯スコールのため、いくら道路を補修してもすぐ穴が空いたり、崩れ落ちたりする。いわゆる普通の乗用車は尻餅を就くから通用しない。そこで、日本から持って行ったパジェロとランドクルーザーの4駆の備えがあり、現地人の運転手を雇い、通訳を雇い、さらにマシンガンを持ったガードマンを雇って、農村部へ調査に行く。ある時私たちの車がデコボコ道を進んでいったら、突然両脇から、拳銃を持ったアンチャン達が現れ、「この先の道路を俺達が補修したから、それに見合う金をくれ！」ときたもんだ。そうしたら、わがガードマンは得意のマシンガンを振りかざし、一発威嚇射撃。するとアンチャン達は、たちまち

尻尾を巻いて逃げていった。要するに、かの国のギャングたちは、4駆の車がほしいのだ。

何しろ国に道路の補修を迫っても『穴に落ちて死ぬ奴はバカ』これで済まされる。そしてこの国の警察官は、年間10か月しか給料をもらえない。あとはアルバイトで適当に稼げ！という次第。プロジェクトからは、危険なので出張は必ず日が沈む前に帰ってこい…と命令されていた。帰りには私は必ず3人の雇人にドライブインなどで夕飯を御馳走する。通常彼らは一食100円ぐらいの食事をしますが、私は必ず300円ぐらいのを御馳走する。するとガードマンなど、私の手をきつく握って、次回も必ず私に声をかけてくれと頼んでくる。

そして私の命の保証だが、非常に危険地帯故、もし生きて帰れない場合、国は弔慰金として当時の基準で5千万円支払うという。勿論生命保険は強制的に積まされた。よしんば吾死すとも、あとは何とかなるだろうと思いきや、ノコノコ生きて帰ってきたので、女房の奴、ガクツと来たかな？最後にになりましたが、前ギター会館長木下様の本会ご入会、心から歓迎申し上げます。早く私も全快し、楽しい語らいの時を、切に望みます。

地域に眠る埋もれた歴史（18）
水郷潮来（三）「大生と築地」
木村進

潮来も延方郷校や水郷地帯を取り上げてきたが、もう少し違った古い場所がある。それが大生（おおう）地区であり、また築地地区である。

○ 大生（おおし）神社

大生神社は元鹿島ともいわれる古社です。常陸国一宮の鹿島神宮に元鹿島と言われる社があることをご存知だろうか。



場所は鹿島神宮とは北浦を挟んだ西側の少し高台になった潮来市の北端です。長い参道沿いに樹木が茂りひっそりとした佇まいの神社です。大同元年（806年）創建とも言われるが、年代は明らかではありません。祭神は鹿島神宮と同じ健甕雷之男神（たけみかづちのおのかみ（武甕槌神））であるが、ここが元鹿島と言われるのは、タケミカズチが最初にこの地で祭られた場所と言い伝えられていることにあります。そして、今の鹿島神宮に遷宮されたと伝えられているようです。

大和国の多（飯）富族がこの地に移住し、その氏神

として祀ったのではないかと考えられています。神社には天正8年（1590）の棟札が残されていて、鹿島神宮の神職を勤めている東家の文書に、この大生神社は南部大生邑（多村）から移されたところとあります。この大和の神社は「多坐弥志理都比古神社」です。そして、この大和の神社は多（おお）氏の太安麻呂の子孫が神主となつて続いています。本殿は県指定の文化財に指定されています。

この神社を理解するためには常陸国風土記の内容を少し紐解いておかねばならないようです。

奈良時代初期713年頃にまとめられたと言われる常陸国風土記の行方郡の項に「建借間命（たけかしまのみこと）」（＝鹿島神宮の祭神＝タケミカズチ）について書かれた記述がある。

「天皇（崇神天皇）の御世に、東の国の荒ぶる賊を言向けんとして、建借間（たけかしま）命を遣はされた。建借間命は、軍を率ゐて賊を言向けつつ、安婆（あば）の島に宿を設けたとき、海の東の浦を遙かに望むと、煙が見えた。軍人たちはこもごも賊軍ではないかと疑った。建借間の命は、天を仰いで誓（うけひ）して、「もし天人の煙ならば、立ち来たつて我が上を覆へ。もし荒ぶる賊の煙ならば、遠ざかつて海へ靡け」といふと、煙は、海へ向かつて遠く流れて行った。かうして賊であることがわかったので、軍兵みなに命じて朝飯を早く済ませて、軍は海を渡った。一方、二人の国栖（くす）ず、夜尺斯（やさかし）、夜筑斯（やつくし）は、賊の長となり、穴を掘り、小城を造つて、そこに住んでゐた。官軍を見るとこそそこそと抵抗し、建借間命が兵を放つて駆逐すると、賊は一斉に小城に逃げ帰つて、門を固く閉ぢて立て籠もつた。すぐさま建借間命

は計略を立て、勇敢な兵士を選んで山の凹所に潜ませ、武器を造つて渚に並べ整へ、舟を連ね、筏を編み、衣張りの笠を雲と翻し、旗を虹と靡かせ、天の鳥琴（とりこと）・天の鳥笛（とりぶえ）は波の音と調べ合はせて潮と流し、杵島（きしま）ぶりの歌を七日七夜歌ひ踊つて、遊び楽しんだ。この楽しき歌舞を聞いて、賊どもは、家族も男女も揃つて出て来て、浜辺に群れて楽しみ笑つた。建借間命は、騎兵に城を封鎖させ、背後から賊を襲つて捕らへ、火を放つて滅ぼした。痛く討つ言つた所が、今の伊多久（板栗）の郷であり、ふつに斬ると言つた所が、布都奈（ふつな）の村であり、安く斬ると言つた所が安伐（やすきり）の里であり、吉（よく）斬ると言つた所が、吉前（えさきの邑）である。板栗の南の海に、周圍三四里ほどの洲がある。春には香島（か）や行方（か）方面から男女が挙つてやつて来て、蛤（かき）、うば貝（うばい）その他の貝を拾ふ。：（一部略）

田の里より南に相鹿（あふか）、大生（おほし）の里がある。昔、倭武（やマト）の天皇（ヤマトタケル）が、相鹿の丘前（かざき）の宮に留まられたときに、膳炊屋（おほひの）を浦辺に建て、小舟を繋いで橋として御在所に通はれた。大炊（おほひ）から大生（おほし）と名付けた。また、倭武（やマト）の天皇（ヤマトタケル）の命が、大和（おほみ）から降り来て、この地で天皇（ヤマト）にお逢ひになったことから、安布賀（あふか）の邑（むら）といふ。」

（口訳・常陸国風土記より）

これによると、タケミカズチはまず今の霞ヶ浦の南岸にある阿波（あ）（大杉神社のあたり）に滞在し、流れ海（霞ヶ浦）の北側で暮らす人の煙を眺めていた。そしてそれが敵（蝦夷人）か味方（大和人）かを探っていた。そして、それが敵（蝦夷人）であるこ

とを知り、制圧のために流れ海（霞ヶ浦）を舟で軍を進めます。対岸で、その住民を従わせようと思いますが、その住民たちは素早く自分たちのすみかである穴などに潜り込んで出てこなくなります。こまったタケミカヅチは、天岩戸の話よろしく、七日七夜の間、火を焚き・歌い踊り・笛を吹いてどんちゃん騒ぎをしたのです。

最初は穴ぐらに潜ってしまっていた地元の原住民たちは、その様子を伺いながら皆出てきて、その宴に参加してきました。するとどうでしょう。

彼らの住居としていた穴を塞いで、そこに出てきた原住民を皆捉えて、火を放ち皆殺しにしてしまったのです。（これは茨城の名前の起りとなった黒坂命が土蜘蛛の棲家を灰で塞いで殺したのと同じです）その原住民を痛く殺したために、この地が「伊多久（板栗）」になり、今の潮来という名前になったというのです。この地を制圧したタケミカヅチの一族（『多氏』はこの大生の地に自分たちの棲家を建て、自分たちの大和にあつた氏神をこの地にも持つてきたのが、この大生神社の始まりではないかと思われま

す。そして、この神社にタケミカヅチが祀られ、その後鹿島神宮に祀られるようになったのかもしれない。でもこの神社の創建はこのあたりの古いたくさん

の神社と同じ大同元年（806）と言われている。元鹿島というには少し時代が後のような気がします。この大生神社がもっと古くからある神社としても、では鹿島神宮の方が新しいということはありません。そんな鹿島神宮は安易なものではないと思います。

この地を制した大和朝廷の人々は、この地の住民を治めるのに、鹿島（香島）に強大な力を感じてここを原住民たちや自分たちの共存共栄をはかるシンボルとしたのではないかと思います。ですから最初は大生神社に祭られたタメミカヅチを鹿島神宮に移したのかもしれない。鹿島神宮の神宮であつたとも言われる中臣氏と中臣鎌足（藤原釜足）とのつながりはあるはずですが、鎌足が常陸国で生まれたのか、大和国で生まれたのかは定かではありません。常陸国出身という説はかなり確率は高いと思っています。

奈良の御蓋山（みかさやま）に藤原氏の象徴として

建てられた「春日大社」は鎌足の子「藤原不比等」が710年に建立したものです。この神社は常陸国中

臣氏の祭神「タケミカヅチ」が白鹿に乗って山に降り立つたとされています。この神社には「巫女舞」という祭りがあります。13歳までの少女が毎年選ばれます。また、この大生地区には5世紀頃の

の築造といわれる古墳がたくさん（百十金墓）残されています。この神社の西側に分布していて、県内でも屈指のもので

す。またこの古墳の埋葬者は多氏一族であると言われています。ここまでタケミカヅチについて書いてきましたが、この地にヤマトタケルがやはり上陸し、ここから西側の行方

方面に進んだという伝承が残されています。東京湾（走水）を渡るときに妻である弟橘媛が入水して死に別れたのに、この近くの相鹿（あうか）で天から降りてきて再会したとも言われているのです。

（常陸国風土記）

○ 文殊院（大生）

さて、大生神社の少し先に「文殊院」がありま

す。古ぼけたお堂が3つ並んで置かれています。



こんな立派なお堂が横に3つ並んでいるのを見たのは初めてです。入口の石柱には「大生山 文殊院」と「天台宗 神宮寺」と左右に分かれて書かれています。神宮寺というので、恐らく大生神社に付帯して後から建てられたものでしょう。

1698年の棟札があるというので、江戸時代初期に建てられたものなのか、それとももっと前からあつたのかは明らかではありません。

左から阿弥陀堂、観音堂、地藏堂です。

変わっていますよね。普通は寺のこれらの建物は全体の中でバラバラに配置して置くのですが、このように隣接して並べておくのは見たことがありません。どんな意図があるのでしょうか。

それに寺の本堂はどうしたのでしょうか？ や

はり多氏（おとし）と関係があるのでしようか。

阿弥陀堂厨子には寛文5年（1665）と書かれており、貴重なものです。この阿弥陀様は、地元では「いば取り」の信仰があるそうです。観音堂の中には毘沙門天・十一面観音・不動明王が祀られています。安産・子育ての神様として信仰されています。地藏堂には小さな「地藏菩薩像」が祀られています。このように中の像が完全に残っているのも最近では少なくなりました。大切にして欲しいと思います。

○ 妙光寺（潮来市築地）

築地は潮来市にあり大生の少し南側の地域で主要街道も走っていない場所だ。麻生の一条寺を見学してこの寺の関係からこの場所を知った。ここは実に不思議な場所だった。妙光寺は道をグネグネとナビを頼りにたどり着いたが、実に立派な寺であった。現地の潮来市教育委員会の説明板の内容をそのまま書きだしてみます。

「本圀山妙光寺 この寺は文永2年（1265）、宗祖日蓮大聖人の直弟子、中老僧一乗阿闍梨日門上人の開祖、当時隣村の水原村に居住していた油井但馬守国光、横山遠江守勝光が鎌倉参勤の際、日門上人を招聘し一字を創立したのが始まりである。即ち本圀山妙光寺と号し、常陸国最初の日蓮宗の古刹である。その後、正応3年（1290）中道院日正上人によって現在地に移転される。往昔は朱印等があつたが、記書焼失のため上地となるなど一時退転の形勢となりましたが、十六世日遙上人の時、代官矢野九郎右衛門、郡奉行萩原庄右衛門、芹澤伊賀守、三木五兵衛等の力により水戸藩から費用を仰いで九間二七間の客殿を建立し

た。

元禄12年（1699）十九世徳大院日具上人の時、徳川光圀公より費用を下附され四間四面の本堂を造営した。堂内の日蓮大聖人の御尊像も同時に奉納され、また法華三昧堂の正面の額は光圀公自筆の書である。二十世日孝上人の時、徳川綱條公より祈禱料として玄米五十俵を下附された。現在の本堂は寛永年間（1624～1643）の再建にして、寺宝には日蓮聖人直筆の御本尊並びに御消息断片、日門上人直筆御本尊、徳川光圀の書簡、光圀拝領の蒔絵法衣箱・状箱・硯箱、紺紙金泥法華経開結十巻などがある。……」

説明によれば、この寺は日蓮宗の常陸国では一番古い寺だそう。本堂から少し上ったところにある「法華三昧堂」があり、この堂の額は光圀直筆だとの説明があつた。この寺の説明では日孝上人は第二十世となつていた。何故このような場所に寺ができたのだろうか。「築地」という地名にかかわっているような気がします。

○ 熱田神社（潮来市築地）

「妙光寺」から800mほど南の同じ築地地区に「熱田神社」がある。地図を見ると道路がこの場所に集中しているようだ。街道から少し脇に入った場所の少し高くなった場所にあつた。

まわりは木々に覆われ古くからあることが分かる。

現地の説明は、「日本武尊、東征の折当地に立ちよる。東は鹿島、南向香取、西方遙かに筑波の霊峰を望み、北は北浦に接し展望絶景高燥の地なるを以って戦勝祈願を行ったという。この地にあつて尊の命に従い功のあつた三十番神を褒め称えた。

村人はその跡を都恵地（築地）と称し祠ありしが、大同元年（806）社殿をつくり日本武尊を祭神とし三十番神を合祀、尊崇した。延宝3年（1673）水戸藩主・光圀公巡視の折、由来を尋ねられ熱田神社の神号を賜る。」と書かれています。

この中に面白い記述があります。

・ヤマトタケルがこの地でこの辺りに住んでいた部族を退けたので、戦勝を祝って戦功のあつた三十の勇者を讃えた。

・そしてこの地の名前を「都恵地」と名付け、後に「築地」となった。

・水戸黄門がヤマトタケルの戦勝記念の話を聞いて、草薙の剣が奉納されている熱田神社と同じだと言うことで「熱田神社」と改名した。

簡単にわかりやすく書くとこんな意味でしょうか。

このあたりで地元部族をやつつけたのは「建借間命」であり、この後に水戸から那珂川へと攻め込んでいく。ヤマトタケルはこの後にやってきたのだろうか。常陸風土記ではヤマトタケルの記述はその後に書かれていて、「田の里より南に相鹿（あふか）、大生の里がある。昔、倭武の天皇が、相鹿の丘前をかざきの宮に留まられたときに、膳炊屋舎（おほひどの）を浦辺に建てて、小舟を繋いで橋として御在所に通はれた。大炊（おほひ）から大生（おほむ）と名付けた。また、倭武の天皇の後の大橋比売（おほたちはなひめ）の命が、大和から降り来て、この地で天皇にお逢ひになったことから、安布賀（あふか）の邑といふ。」と書かれています。この「倭武の天皇」がヤマトタケルのことで、この地で東京湾で自ら海に入水して亡くなったとされる弟橘媛（おとたちばなひめ）に再会しています。

この築地という地名も考えるとかなり深いものがありそうです。この神社の隣りに「津知第二小学校跡地」があります。このような場所は何かの記事をきっかけにでもして出かけない限り、恐らく見ることも知ることもしなかつただろうと思います。

サイキンノワカモノハ にわやま ゆみこ

最近の若者はまったく根性がない

最近の若者はひとつも長続きしない

最近の若者は本当にどうしようもない

私がつと若者だった頃、白く脱色した髪の毛が逆立つ程、耳にするたび憤慨していた呪文です。

自己を犠牲にしてキツつい根性を無理矢理出さなくても

力の抜けた肩のおかげで、要らないものはすぐ判り、一人一人の性質を出し切る事で創造ができる

と、いう事は、それだけ日本という国は幸せな場所に変化したということではないでしょうか。

戦争が終わってから日本をここまで立て直してきたのは私の身の回りにも沢山いる年寄りのみなさんです。

生きていくうちにもつとたくさんお話を聞かせてください。

子供の頃食べていたものとか、川原に生えていた花の名前とか、好きだった遊びの話とか。

インターネットで検索しても絶対に出てこないこと。直接、人から人へ伝えられる小さな玉のようなもの、いろんな色に輝いています。どうかその宝の玉を預けてから逝って下さい。運よく平和ボケしている我々は、それを使いこなし、次へどんな風に渡して逝こうか。そんなことを毎日毎日、飽きもせず考えながらひよいひよいと動き回っている。

ああ父上。

最近の若者はそんな奴ばかりです。

〃戦後七十年〃

師匠によると六十年で時代は変わるそう。だったらそうだな。戦を基準にカウントすることからまず卒業しよう。と勝手に決めた二〇一六年八月十五日。灼けつく墓石の前でひとりつぶやく。重い荷物はおろしてデータで残す。軽くないとこれから吹いてくる風にのる事はできないから。すっかり黒くなった髪の毛だけはサラサラと音をたてずになびいている。水戸にいい美容室を見つけた。

日本音楽の話

〃日本音楽の勤労者の理解のために〃

木下明男

今から50年前、私が20代初め、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。1959年中学校を卒業し、品川区にある大企業の技能者養成所に入りました。3年間技術を習得しながら、高校

と同様の学問も受けられる魅力に惹かれ入社しました。1960年の安保闘争で団結力を身につけた労働組合は、もろもろのサークル活動を基礎に、職場の隅々まで明るく諸要求を実現できる職場でありました。養成所3年間は組合活動禁止でしたが、諸先輩から誘われ諸々の活動に…?

強くなりすぎた組合弱体化のため、新賃金制度(会社職制の強化)導入して、組合への分裂攻撃をしてきました。このような背景をきっかけに、労音のサークル活動に関わる様になりました。会社からの組合分裂攻撃により、さまざまな人間関係、愛憎を経験した私は、会社以外の、労音の仲間との交流を通して、社会のあり方を学びました。

そんな労音の地域活動の仲間から送り出され、北海道函館労音との交流会に参加したのが、生涯をかけた音楽運動への参加決意でした。

そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります!

そんな時に学んだテキストから…。

1 日本音楽の原則生と特殊性

今の日本音楽の二つの面

日本人の歌ったり聞いたり演奏したりしている音楽を、「日本の音楽」と考えて見ると、なんとさまざまな音楽があることか!

まず、毎日のテレビやラジオです。外国の音楽が圧倒的に多い。クラシック、ジャズその他の大衆音楽、それらはみなヨーロッパやアメリカの音楽です。そのあいだに、僅かの日本の民謡や歌謡曲などがはさまっていて、そのなかへ、ほんのちよつぱり、邦楽(琴や三味線の音楽)や能楽などがはいりこんでいるという始末です。テレビは、毎朝、

「テスト・パターン」で始まりますが、これが外国語であるように、音楽のほとんどすべて外国ものです。日本人が音楽の調子を整えるのですから、日本の音楽でやつたらよさそうに思います。各地の音楽会でも、外国ものの演奏が圧倒的に多いです。

東京オリンピック（1964年）体操に女子の床運動でチエコスロバキアのチャスラフスカさんが優勝した。これには音楽の伴奏がつくのですが、チエコもソビエトも、みな、自国の民族音楽でやっていました。日本の選手だけは、日本の音楽を使わないで、ヨーロッパの音楽でやりました。どうして、そんなに、何から何まで、ヨーロッパのまねをしなければならないのでしょうか。「六段」や「ちどり」や「さくら」などを伴奏に使い、体操にもニッポンの踊りの手などを取り入れたら、どうしていけないのでしょうか？ そうしてこそ、国際的なスポーツの内容をゆたかにし、質をひきあげることもできるのではありませんか？ 「国籍のない音楽」などと今の日本の音楽が呼ばれる原因はここにあります。

では、日本の民族的な音楽が国内になくなっていくかというと、そうではありません。各地の民謡は盛んに歌われていますし、職場でも、民謡サークルのないのが、むしろ、少ないくらいです。能の「うたい」人口は二百万人といわれています。ごく小さい町にまで、語りもの（義太夫、ときわず、清元、新内、その他）や歌地歌、（長唄、はうた、その他）や踊りの師匠や家元がたくさんいます。なにわ節（浪曲）も広く愛されています。また、宮内庁や各地の神社では、千年以上もまえから伝わっている雅楽がそのまま演奏されています。

これらは、すべて、今の日本人が演奏して、今の日本人が聞いている音楽です。すべてがただ雑然と入り乱れていて、民族的に統一して一定の方向に発展する正しい形になっておりません。これが今の日本音楽のひとつの面です。

これにたいして、もうひとつの面があります。

つまり、労音、歌声、わらび座、その他の新しい音楽運動がおこって、何十万、何百万という勤労者が、真に民族的で民主的な新しい日本音楽を作り出そうと、粘り強い努力を続けています。これが、また、今の日本音楽の別の面です。今の日本音楽はこういう相反した二つの面を持っています。

歴史的特色

これは、今の日本音楽の特色で、前にはこんなことはなかった。例えば、外国の音楽がこんなに無方針、無制限に流れ込んで、日本音楽にこんな大きな影響を与えることは、前に一度もありません。だからこれは、歴史的な現象です。もちろん、根本の原因は、今の日本がアメリカに半ば占領されて、独立を失っていることです。政治的に主権をおかされているために、文化的にも侵略を受けています。アメリカ帝国主義と日本独占資本が日本音楽をこういう方向に押しやっています。

これにたいして、民族の独立・平和・民主・生活向上のために、真っ向から二つの敵と激しく戦って、真の民族音楽を建設しようと努力しています。

いまニッポンの国内でおこなわれている階級闘争が、音楽の面では、こういう形で表れています。これは、世界のどの民族の音楽にもあてはまる条件でもなければ、また、日本音楽史のどの時代のものでもなかったことです。だから、あくまで、今の日

本音楽の特殊性です。

音楽発展の方向

今の日本音楽はもう一つの条件を持っています。すべての民族がそうであるように、今の日本民族も二つの要素をもっています。一つは、国際的な横のつながり、その影響で、もう一つは、民族的な縦のつながり、その伝統です。今の日本民族はこの二つの線の交差点に立っています。同じように、日本音楽も、また、国際的な音楽の横のつながり、その影響、民族音楽の歴史の縦のつながり、その伝統、この二つの線の交差点に立っています。これは避けることのできないことで、問題はそのどちらに中心をおくかということです。もちろん、民族伝統に中心をおき、それを外国音楽の影響で育てていかなければなりません。民族文化を正しく発展させる道はそれがいかにありません。民族の独立を確保することなしに平和や民主主義や生活向上の問題を解決する道がないのと同じです。

社会は、すべての人類に共通する一つの法則に基づいて、これまで発展してきました。生産力と生産関係の矛盾とその解決を基礎に、発展しようとしています。これは原則です。今のわたしたちも、この法則にしたがって、生き、発展を続けています。すべての文化がそうであるように、音楽も、このそれぞれの歴史社会を反映して、その基礎のうえに、発展してきました。それぞれの時代の音楽には、夫々の時代の音楽があります。

わたしたちの日本音楽も、原則に従って、生き、発展を続けています。今の日本音楽は、この特殊性と原則性と、二つの要素を持っています。特殊性は原則性を基礎に、そのうえに浮かんだ特殊性です。特殊性がどんなに大きくても、原則性をこ

わすことはできません。日本音楽は、それぞれの時代に、それぞれの特殊性をもちながら、原則性に従って、これまで発展してきました。これから、それぞれの時代の特殊性を十分にもちながら、しかし、やはり、原則性に従って、正しく発展するに違いありません。最初にあげた、日本音楽のもつ二つの面も、この原則性と特殊性の矛盾から生まれたもので、その代表的な現われにほかなりません。

音楽運動の意義

そこで、日本音楽にたいするわたしたちの態度を確立することができます。第一に、今の日本音楽は資本主義社会の音楽です。つぎに、それは外国帝国主義になかば占領されている社会の音楽です。しかし、それは、同じ資本主義社会の、同じように外国帝国主義になかば占領されている、ほかの民族の音楽とは、非常に違う特殊性をもっています。それは、日本民族の歴史、それに基づく日本音楽の伝統によるものです。同時に、今の日本音楽は、やがて、独立を回復した民族の音楽に進み、さらにより発展した社会の音楽に進まなければならない、原則性を持っています。だから、わたしたち労働者階級の立場に立つ者は、そういう方針で、音楽の運動を続けることができます。

母島へ

伊東弓子

あの旅で飲んだ茶がなくなって久しい。あの余韻を懐かしみながら入れ替えて、袋をずっと使っている。

「母島へ行くよ」と、声が掛ってから半年、とうとうその日がやってくるとは夢のようだ。七十年代前半の姉を二人連れて行く責任があると、全て御膳立てしてくれた事は有難かった。

「後は、自分の体に責任をもって元気で行けるようにしておくように。男とはいえ二人の姉さんを負ぶって帰ってくるようでは仕様がなからな」弟のその言葉に早速病院に行き、それなりの処置をし、昨年からの心配事に終止符をつけた。自分のために本当によかったと自身にみちて待ちどおしい毎日だった。

何故母島か、それは父にとって忘れ難い所なのだ。九月六日は、子供達を前にして大好きなお酒を飲みながら語り始まるのだった。

「今日は、父ちゃんの冥日なんだぞ。でもこうして生きているんだから、誕生日でもあるんだよ。父ちゃんには誕生日が二回、冥日も二回ってことになる」

話しは、小笠原の海、そして母島の話しになる。九月に入っても暑い日が続き、甲板の陰の方で昼食をしていた人もいたそう。船は荷物を沢山積んで大きな島へ行く途中だった。青い海の美しさは忌わしい戦争の状況など、忘れてしまう程だったのだろう。その後の父の人生の中で「あの青い海、奇麗だった」と何回も、何十回も聞いた。

突然、アメリカの船から魚雷が放たれ、父達の船の横っ腹に飛んできたという。物凄い揺れと共に真つ二つに割れて行ったそう。

父は身振り手振りもよろしく、声を上げ船が沈んで行く様子を語ってくれるのだった。甲板の上に止められていた戦車の鉄鋼が切れて、昼寝をしていた人達の上に落ちていった。そこには隣り町

（名字も同じ戦友）の人もいて悲鳴を上げ「助けてくれ！足を切ってもいいから、助けてくれ！」と叫んでいた声を今でも耳から離れないと俯いて言う。上官は浮袋、浮輪、ボート、ありとあらゆる物を海に下し「早く、早く、それに。あれに捕まって早く、少しでも遠くに逃げる。行け。船から離れる。早く、早く、行け！」と背を押したという。

「上官、上官。お先に、お先に、上官も来てください。上官、上官」

声が波の上を流れるように、そして消されていったことだろう。板切れに掴まり、ボートによじ登り、棒にしがみついていた人々に、ギラギラ輝く太陽は、この光景を何とみていたことだろう。晴れ渡っていた空は、全てをお見通しだったろう。

青い海は一層波高になって、アメリカの船を遠くに送り、「遠くへー！」「上官！」の声も、散らばった漂流物も、傾いた船をも大口を開いた渦が全てを飲み込んでしまった。その轟音と吸い寄せられていく水の勢いは、想像もつかない恐ろしい情景だったろう。一瞬の静けさから間もなく、水飛沫が天に届かんばかりに昇った。そこには物や人、今、目の前で吸い込まれていった全てが吸い上げられて飛んでいき、それらが水面に叩きつけられるように落ちてきた。その後は何もなかったかのように静かな海になったという。魚雷が撃ち込まれてからどの位の時間かも分からないが、あまりの変わりように恐怖が募り、不安が積もってもただ海の上を流れているだけだった。誰からだろう。声が上がった。

「おい、元気を出せよ。挫けるな、必ず助けが来るぞ。唄おう、歌だ！」

傾いた夕陽が染める海の美しさ、青い海とまた違う美の中に佛は表れたと、父は言った。日本の船が助けに来てくれたのだった。九死に一生を得たとはいえ、母島に戻って終戦までの一年一ヶ月は苦しい毎日だったという。任務の苦しさとは違う、食料がなくなっていく苦しさ。物、衣類の不明が出ると連帯責任ということで殴られたそう。体の弱っている人は翌朝亡くなっていた。そういうことは度々だったという。

こんなふうには日本人同士が虐め合うようでは、この戦争は御仕舞いだと心の中で思い、勝てる筈ないと唇を噛みしめたという。高台で海が見える度に、上官のこと、亡くなった戦友のことを思い祈ったという。

「坊主だろう。火葬の準備をしろ」

何度戦友たちの姿を、臭いを灰にしたことか、辛かった任務だったそう。

「手紙を書いてくれ」と言われ、時々出入りする部屋には、美味しそうな菓子もあつたとか。理不尽の上ないことばかりだったと、体中で水飛沫を表現し沈んでいく船体になりきって話してくれた。孫が出来て、世代が増えていく中でも続けられた。亡くなった人々を忘れることは出来ない。一生背負っていかなければならない思いの現われだったのだろうと思う。

私も子供達に孫達に伝えていかねばならないことが沢山ある。

話しの最後には「父ちゃんが生きていてよかったと思うことは何だか分かるか。父ちゃんはな、人として笑ったり、怒ったり、悲しんだり、悔しがったり、泣いたり出来たことがよかったと思ってるんだよ」と、必ず、あとは祝いであり、

追悼であり、みんなでご馳走をいただくひとときだった。

あの青い海をもう一度見たい。戦友の亡くなったあの海へ行って冥福を祈りたい。果たせなかった父の願いを叶えるための三人の旅の始まりを迎えた。

五月九日(月) 午前十時。一路1000キロを「おさがわ丸」で、竹芝桟橋から出航した。

県指定文化財(16)

兼平智恵子

昨年の石岡のおまつりから一年間、指折り数えて待ち続けていた常陸國總社宮例大祭が九月十七日(土)、十八日(日)、十九日(月、祝日)開催されました。

旧市街地十五町内の内、一年交代で「年番町(今年は宮下町です)」になった町内に「仮殿」がもうけられ、お出ましになった御分霊、神さまが皆さんからの歓待をお受けになります。この三日間は石岡囃子に合わせての踊りや、獅子舞い(三十台の囃獅子)と様々な神事を見ることが出来ます。

今年三月に完成した新石岡駅前では、例年になく

石岡囃子に合わせてのおかめ、ひよつとこ、きつねの踊りや、髪をふりかざしての獅子の舞いが、大いに盛り上げてくれることでしょう。

また今回は当会報先月号でご案内しました新石岡駅構内に展示されている市内佐久にお住まいの高橋章子さん製作のステンドグラスに描かれた滝平二郎さんの春夏秋冬のきりえにもご注目下さい。

春夏秋冬の絵に添えられた文をご紹介します。

春の題「つくしんぼ」

つくしんぼは、すぎの子といわれる通り、すぎなの地下茎から顔を出す胞子茎がつくした。頭が筆の形をしているので漢字では「土筆」書く。すぎなは、とくさ科の植物なのだそう。道理でどちらともこまかいスジがざらざらしている。とくさは漢字で「木賊」と書く。つくしを「土筆」と書くのはわかるが「木賊」をとくさと読め、というのなんとも不可解だ。

夏の題「バスが行く」

むかし、わたしの田舎ではバスのことを乗り合自動車といっていた。通りかかった乗り合自動車に、手あげて合図すれば、田んぼ道のまん中であろろと、どこであろろと車は停まって、ハイよといつて乗せてくれた。いつのまにか、バス停などというものが出来てそこへ並ばないと乗せてもらえなくなった。不便になったなあ、といい合ったものだ。

秋の題「赤とんぼ」

ついこのあいだ酷い歌を聞いた「赤とんぼ 羽をむしれば とんがらし」というのだからあきれる。そういうわけてみれば……などとゆめゆめ申すべからず 赤とんぼに申しわけがたちません。

冬の題「雪がつせん」

手加減しながら始まった雪合戦もだんだんはげしくなると接近戦となる。気の弱い者は逃げまわり、女の子や幼い子らは主戦場からはじき出されて見物客となるほかはない。ちなみにこの合戦、勝負けの判定なしに、いつのまにか終戦をむかえる。

滝平二郎さんは「たとえ、たった一つの女の顔の中にも、私さがし求めてやまないのは、人間のドラマである」と心の丈を書かれています。

描かれている一人ひとりの眉、目、鼻や仕草や

背景に込められた滝平さんの物語をご鑑賞下さい。

本題の県指定文化財の紹介に入ります。

○山縣大弐の墓 史跡

指定 昭和一〇、十一、二六

所在地 石岡市根小屋

石岡市八郷地区根小屋の泰寧寺境内に存在し、泰寧寺はかつて同地区内にあった片野城の城主であつた佐竹氏の一門である石塚義高氏によりもたらされた名刹で、慶長七年（一六〇二）佐竹義宣とともに秋田に移った石塚氏のあとに城主となった下総守滝川雄利氏の墓もあります。

山縣大弐は、享保十年（一七二五）に現在の山梨県甲斐市に生まれた。医を業としたが、神道、儒教、仏教の教養深く、宝暦元年（一七五二）江戸に出て塾を開き兵学を講じ、その門下生は三千人に及んだといわれる。同九年（一七五九）に『柳子新論』を著す。

ところがこの内容が尊王思想に基づき幕府に批判的であつたため、大弐は捕縛のあと処刑され、その首が刑場にさらされた。

この時、門下生の一人であつた八郷地区根小屋出身の菌部文之進が、密かにこの首を故郷に持ち帰り自宅の墓地に埋葬したという。その後、明治になり菌部家菩提寺の泰寧寺に葬られ祀られました。

維新後の明治二四年、大弐に正四位が贈られ、出生地には山縣神社が建立され祀られている。

常陸風土記の丘を左側にして前進すると間もなく信号のない丁字路を左折し前進、右側には龍神山、鬼越峠を越えると、左側に茨城県畜産センターが広がります。曲がりくねった道を少し走ると

田園地帯が広がり左側には、ふるさと橋の下を流れる恋瀬川、そして小高い富士山（ふじやま）をまえにして、一つ三角形（男体山、女体山が重なっている）の筑波山がすそ野を広げ雄大に聳えたつています。右側は（筑波山とは相對している）泰寧寺です。ゆったりと本堂が立ち、歴史のある墓石など立ち並ぶ境内にたたずむと、先ほどの田園とふるさと橋と富士山と筑波山が広がる素晴らしい風景、心落ち着くいやされる所でした。

私は以前、泰寧寺さん主催の座禅を組む体験に参加したことがあります、今回の山縣大弐の取材の際には住職さんにはお世話さまになりました有難うございました。熱い日でした。帰りには、ボトル入りの冷茶を頂き、体がひんやり足先まで涼しくなりましたご馳走様でした。

※参考資料 泰寧寺由来案内・石岡の歴史と文化・滝平二郎きり
え名作集

・東京オリンピック指折り数えて歳確認 智恵子

リオ・オリンピック

小林幸枝

八月六日から二十二日までブラジル・リオで行われたオリンピックでは、日本中が大興奮させられた。メダル獲得数も過去最高の金12個、銀8個、銅21個、合計41個。素晴らしい快挙でした。

日本とは全く裏側の国なので夜と昼が逆で、毎日寝不足の連続だった。日本人がこれほどの活躍がなかったら寝不足にならないで済んだかもしれないが、日本人選手の大活躍があつたからこそ

嬉しい寝不足でした。

私が一番感動、興奮したのは、男子400メートルリレー。銀メダルを予想できた人は、私だけはない。殆どいなかったらと思う。ジャマイカ、アメリカをはじめとする強豪の中で、入賞が出来たら万々歳だろうと思つていたのでしたが、ウサイン・ボルトに最後まで喰らいついてアメリカを抑えての銀メダルとは。興奮すると言われても興奮しないわけにはいかない。

41個のメダルを思い出すと、その全部が最高のドラマを見せてくれたと思う。特に女子選手の活躍は素晴らしかった。レスリングの吉田さんは4連覇を逃し残念ではありましたが、銀メダルと言うのは大称賛だと思う。全選手が打倒吉田で研究し尽くして挑んでくる中での優勝決定戦にまで登ってくるのだから。勝敗はその時の流れが大きく左右するのだから、だれも予測することができないことです。

今、こうしてオリンピックを思い起こすと、全部の競技が大称賛だったと思う。

次のオリンピックは、東京。選手たちは、またこれから4年間、私達には信じられないようなトレーニングを積みあげていかなければ、感動と言うドラマを作ることはいかないのだ。

私も、バレーボールやマラソンをやつて来たので、練習の辛さは良く分かる。物凄く過酷な練習に耐えて、優勝候補といわれていて競技に臨んでも、柔道などでは一瞬のスキを突かれて一本負けしてしまふ。4年間の成果が第一試合の数秒で終わってしまうこともある。そんなことを思いながら、リオの選手団には大きな拍手を送りたい。

【風の談話室】

《読者投稿》

私の国府巡り「御食つ国」京都府精華町 今井 直

飛鳥・奈良時代にかけて、天皇を中心とする中央集権国家の建設が、唐の律令制度を手本にして進められた。律令の「律」は刑法で、「令」は政治を行う上での基本法である。孝徳天皇は大化二年（646）に改新の詔により、地方行政組織の整備を明確にした。五十戸で「里」「後に「郷」、二〜二十里で「郡」となり、幾つかの郡が束ねられ「国」を構成した。「令」に基づき成立した「令制国」は、奈良時代から明治初期まで改廃されることなく、千年以上に及ぶ地方行政区分の基本単位だった。

平安中期に編纂された『延喜式』では、各令制国を政治面・経済力・面積・人口などによって、大國・上國・中國・下國と格付し、畿内の他は都からの距離により、近國・中國・遠國と分類した。志摩国・淡路国・若狭国は、いずれも近國だが一國に二郡しかなくランクは低い。志摩国は答志（とうし）郡と英虞（あこ）郡からなり、東海道に属した。今年五月にサミットが開催された風光明媚な地である。南海道に属す淡路国には、三原郡と津名（つな）郡があり、『古事記』が伝える国土創世譚の島だ。若狭国は遠敷（おにゅう）郡と三方郡の二郡だったが、後に大飯郡が分立して三郡となり、北陸道に属す。

令制下では、各国に租・庸・調の税が課せられたが、これら三国とも山がちで耕地面積が狭く、農作物の収穫は他国に比べ極めて少なかった。そ

のため、国としての地位は志摩・淡路とも下国で、若狭はかろうじて中国だった。志摩国では国衙や国分寺の費用を、隣接する伊勢国や尾張国・三河国が負担し、国司が志摩に赴くこともなかったという。それにも関わらず、「国」として存続していたのは特殊なワケがあった。

志摩・若狭は複雑に入り組んだリアス式海岸で、天然の良港が多い。淡路島は瀬戸内海で最大の島であり、古くから海上交通の要衝であった。三国に共通するのは、豊富な海産物に恵まれ漁業が盛んな点である。昔から塩や鮑・海草などは、神饌・神前の供え物に用いられる特産品だった。志摩・淡路・若狭は、海産物を中心とした贄（にえ）「貢ぎ物」を朝廷に納めることで、生活を営んでいたのである。献上された贄は、天皇の日常の食事を担当する内膳司（ないぜんし）や、饗宴での食事を司る大膳職（だいぜんしき）というキッチンで、調理され食卓に出された。

藤原京や平城京で出土した木簡は、多くは都に税として納められた物品に付けられた荷札である。木簡には税の種類「租・庸・調」の代わりに、贄や御贄（みにえ）・大贄（おおにえ）などの文字が見られることもある。若狭から献上された贄の木簡のひとつには、「若狭国遠敷郡車持郷 御贄 貽貝 貽貝一斗」と、書かれていた。ムール貝に似た貽貝（いがい）という二枚貝を、塩に漬け込み自然発酵させた食品を一斗分届けるとある。本来、贄は酒食を自発的に神々に供えるものであったが、海から遠い都では入手しにくい海産物を、税のように収奪したと推測できる。

租・庸・調の税とは別に、贄の納付が定められた国は、「御食つ国（みけつくに）」と呼ばれた。「み」

は尊敬の意を表す接頭語で、「け」は器の意の「筥」。有間皇子の挽歌に詠み込まれた「筥」だ。

家なれば 筥に盛る飯を 草枕

旅にしあれば 椎の葉に盛る

（万葉集 卷十二四二）

後に「筥」は食器から食物の意に転じて、神や天皇の召し上がりものを指した。「筥」は貴人の食物だけでなく、やがて一般の食事も表すようになった。「あさげ」や「ゆうげ」も語源は同じで、「け」が濁音の「げ」と変化したもの。「つ」は「く」にある」の意で、「津」や「都」の漢字をあてることもある。例えば「天つ風」「国つ神」「沖つ白波」など方角・場所や所属を表す。『更級日記』冒頭の「あづまの道の果てよりなほ奥つ方に」の「奥つ方」も同様だ。この一節から平女時代の中期、常陸国は東海道の行き止まりで、「遠國」と認識されていたことが分かる。常陸から京まで租税を運ぶのに、三十日もかかった。

伊勢神宮では、外宮に豊受大御神（とようけのおおみかみ）を祀っている。この神様は内宮に鎮座する天照大御神のお食事を司る御饌都神（みけつかみ）であり、衣食住の守り神として崇敬されている。また『古事記』にも、御世ごとに志摩国から魚類の貢物を奉る「志摩の速贄（はやにえ）」の記述がみられ、神饌は仏教が我が国に伝わる以前の、はるか昔からあった習わしである。

『万葉集』では、「御食つ国」が志摩の枕詞として使われていた。

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の

小舟に乗りて 沖へ漕ぐ見ゆ

（万葉集 卷六・一〇三三 大伴家持）

「あれは御食つ国志摩の海人であるらしい。」

熊野型の小舟に乗って、今しも沖の方を漕いでゆくよ」

平城宮跡では、「鰻（あわび）・海鼠（なまこ）・海松（みる）・鯛・海苔」などと記された志摩国からの木簡が出土しており、朝廷に海産物を納めていたことが裏付けられる。平安京に遷都後も、調や庸として、鰻・雑魚・鯛の干物・いりこ「海鼠の煮干し」・アラメ・フノリなど、また贄として十日毎に、蒸し鮑や生の鮑・サザエを納めることが定められていたと、『延喜式』に記載がある。

『和名抄』には、「志摩國 國府在英虞郡 行程上六日下三日」とあり、クール宅急便のない時代に、京の都に六日かけて海産物を運んでいたことになる。国府や国分寺は通常、水害の恐れがない台地上に造られるが、志摩国の場合、平地は太平洋に面した海岸部に少しあるだけで、交通は主に舟に頼っていたため、海抜三メートルの海岸近くに置かれていた。国府は、志摩市阿児（あこ）町の国府（こ）神社あたりと比定されている。

『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」

古代国家を支えた海人（あま）の営み

長いタイトルだが、今年春に淡路島が文化庁により、「日本遺産」のひとつに認定された。従来の文化財保護という視点だけでなく、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を世界に発信するプロジェクトである。東京五輪を見据え、観光立国を推進し、地域の活性化にも結びつく。「壮大な天地創造の神話には、現代人が忘れていくロマンがあふれる。淡路は古代国家形成期に、優れた航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた海人の歴史を今に伝える島である」と評価された。

朝風に楫（かじ）の音聞こゆ 御食つ国

野島の海人の 舟にしあるらし

（万葉集 卷六九三四 山部赤人）

野島は淡路島北端の西側にある。柿本人麻呂が詠んだ「淡路の 野島の崎の 浜風に 妹が結びし 紐吹きかへす（巻三二五）」で知られる地だ。およそ千三百年後に、野島断層という深い爪痕を残した大地震が起きるとは、人麻呂も赤人も夢にも思わなかっただろう。

五世紀ごろから、大和王権が淡路に屯倉（みやけ）「直轄地」を置き、漁夫たちを直接支配して、海産物などの食料を納めさせる特別な島とした。奈良・平安期には「雑魚」を贄として納めたというが、魚の種類など詳細は分からない。恐らく様々な瀬戸内海の旬の魚介類が納められたのであろう。『和名抄』の記述では、「淡路國 國府在三原郡 行程上四日下二日」とある。現在の南あわじ市「旧三原郡三原町」に「国衙」の地名が残るが、今のところ遺跡は見つかっていない。

そして「若狭國 國府在遠敷郡 行程上三日下二日」。国府の推定地は現在の小浜市府中だが、志摩・淡路と同様にまだ発見されていない。現在もある「遠敷」という地名は難読で、地元や周辺の人を除いて、「おにゅう」と読める人は少ない。元々は「小丹生」と表記されていたようだが、和銅六年（713）の好字二字令により、「遠敷」と改められたという説が有力である。

遠敷川の清流沿いに、神宮寺という古寺がある。天台宗の寺でありながら、本堂入口にしめ縄が張っており、参拝者は二礼二拍手一礼してお参りする。神仏習合により若狭一之宮である上社「若狭彦神社」・下社「若狭姫神社」に付属して建てられた寺だからという。この付近に降臨した遠敷明神を祀

ったのが神宮寺の始まりと伝えられる。

遠敷明神についての伝説は興味深い。東大寺を開山した良弁（ろうべん）僧正の故郷は若狭小浜である。それが縁で、神宮寺で修行していた実忠（じつちゅう）は良弁の弟子となった。実忠は東大寺境内に修行堂を創建し、法会を開いて神々に五穀豊穰・万民安寧を祈願した。二月に行われる行法だから修二会（しゅにえ）、修行堂を二月堂と呼ぶ。それに応えて全国の神々が二月堂に集まり祝福したが、若狭の遠敷明神は漁に夢中で時を忘れてしまい、遅刻して駆けつけてきた。そのお詫びとして、本尊に供えるためのお香水（こうずい）を、若狭から二月堂まで導き、泉を沸き出させたという。それでこの井戸は若狭井と呼ばれる。

若狭から東大寺まで、直線距離でおよそ九十キロあり、お香水が届くのに十日かかるそう。毎年三月二日に、神宮寺で「お水送り」神事が行われ、十二日の深夜に二月堂では若狭井からお香水を汲み上げて、修二会のクライマックスを迎える。千二百六十五年間、一度も絶えることなく引き継がれてきた行事である。若狭で「お水送り」と称するのは、旧暦十月の神無月を、出雲では神有月と称するのと同じ発想だ。また偶然なのか不思議なことに、神宮寺と東大寺は、ほぼ同じ子午線上（東経一三五度五〇分）にある。「お水取り」が済むと、大和に春が訪れる。

古代から若狭は製塩が盛んで、租税の調は塩で納めていた。都に納入された塩の三十八％は若狭産で、全国第一位だという。そのほかに贄として、十日毎の旬料、正月や新嘗祭などに節料、さらに年料としていずれも大量の海産物を納めるよう義務付けられていた。鯛・烏賊（いか）・貽貝・アワ

ビ・サザエ・ウニ・ワカメ・モズクなどである。傷みややすい魚介類だから、ほとんどが塩蔵や干物、発酵させた「なれ鮓」の類だ。数をこまかすことを、「サバを読む」と言うが、鯖は数をかぞえている間にも腐るところから生まれた言葉らしい。

昨春、「日本遺産」の最初の十八件の一つとして、「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 御食国若狭と鯖街道」が認定された。千三百年前から続く鯖街道は、若狭から魚介類を運ぶ生活の道であり、京の都の食文化を支えてきた。若狭湾で獲れた鯖にひと塩し、夜を徹して京都まで運ぶと、着く頃には最も良い味に仕上がる。

小浜から京都まで全長七十八キロある。鯖街道のルートは何本もあり、最短路は針畑越えだったが、「京は遠ても十八里」と、自らに言い聞かせながら、険しい峠道を越えたという。最も一般的な若狭街道を辿れば、朽木くつき・花折峠・大原を経て鴨川に到達する。現在は国道三六七号線となつて整備され、安曇川に沿って美しい景色が連続し、新緑や紅葉が楽しめる素敵なドライブコースだ。

最近、「御食つ国」をブランドとして、地元の食材を生かした産業が活気づいている。滅菌にこだわりの矢（ま）とや 牡蠣は食通に人気が高く、淡路の玉葱は生でかじれるほど甘くて旨い。その旨さは絶品とわかっていても、花折峠の鯖寿司は半切でも二千八百円と聞くと、躊躇してしまふ。伊勢えびを食したのは…とんと記憶にない。やはり宮廷人の食物なのだろうか。玉葱なら私の口にも入るが。

※平城宮跡資料館・飛鳥資料館・若狭歴史博物館の学芸員や

ガイドの方々からの情報や資料などを参考にしました。

養生日記

堀江実穂

「痩せていく」

入院中の私の食事の御飯は180グラムと決められている。

入院前の私は、井に一杯の御飯を食べていた。しかも、おやつも確りと満腹に成るほど食べていた。その所為で、脂肪肝となり、コレステロール値も高くなっていた。

過食症と言っても良かった。

喰っちゃ寝の生活に等しいものであった。

入院してからは、朝6時に違う病室のおばさんに起こされる。そして、6時25分に、おばさんとラジオ体操をさせられている。

半眠りの状態でいやいややっている。

朝食が終わると、作業療法（OT）に参加している。今日は、ゲートボールであった。これまでもゲートボールはやったことがあるが、ゼッケンのマジックテープが届かなかった。ところが今日はマジックテープで止めることが出来た。

「信じられない！」

思わず笑みが浮かんだ。

「痩せている！」

私の体は確実に痩せて来た。

特別に何かをやっている訳ではない。

病院の食事を三食しっかり食べ、ラジオ体操とOTで運動しているだけ。

体が健康を取り戻してきている。心も体が軽くなったのを感じる。

体が軽く感じた分、心に、考えにゆとりが生まれてきたように思う。

「取り残されていく」

入院してから一ヶ月以上が過ぎた。あつという間に時間が流れて行って、今日もまた流れて行く。夏が大好きな私。色々、遊びの計画もしていた。でも、夏の日を病院で過ごしている。

思ってもいなかった。

この現実をどう受け止めたらいいいのか、考えている間にも、時はどんどん過ぎて行く。

入院で沢山の人の出会いがあり、友達もできた。たあいもない話で盛り上がったたり、時には悩みを真剣に聞いてもらったりもした。

そんな中で、仲良くなった人達は次々と退院して行った。

彼らの後姿を見ながら、自分の退院を思う。

私とイソップ

藤 静子

目が丸く、パツチリした猫、イソップが我が家に来た。

ある朝、イソップは激しく苦しそうに、沢山、口から吐いた。

心配だったが、娘と私は出掛けた。

冬の寒い日であった。

夕方、帰宅すると、いつも玄関へ出迎えて来れるはずが、その日は来ない。

心配し探すと、ストープの近い特等席に、目を半眼に開き、身動きせず、横たわっていた。

やっぱり朝から辛かったのね、明日、病院へ行くからね、と言った。

それから二時間以上が経つただろうか、娘が隣りの部屋へ行き、驚き、大きな声で、イソップが

餌の袋を破いて、お腹一杯食べた！　それで身動きが取れなかった事に気付いた。

それから数年が経ち、娘は結婚をし、女の子が生まれ、一歳になり、イソップと一緒に東京へ引越した。

その年の暮れである。

そして、新年を迎え、三ヶ日も過ぎた五日の寒い朝、ギャツと一回泣いて、イソップは死んだ。火葬場へ行き、お骨となった足の指の一つを頂いた。

その帰り道、冬とはいえ、とても穏やかな、雲一つ無い青天だった。

イソップは、きつと感謝しているようだねと話した。

正月の七日も過ぎ、私は、朝早く車で出掛けた。

それは、青く澄んだ清々しい空だった。

そして驚いた。

前方の空に大きく、突然！　五本の長い雲がくつきり浮いていた。

飛行機雲？　そうではない。

もしか、イソップの足！

今迄、ありがとう！と、喜んで、大空へ！　飛び立って行ったようだった。

《風の呟き》

淘汰・進化は「雌の好み」

菅原茂美

生物の進化は自然淘汰で推進される。しかし、配偶の際、昆虫や鳥獣の雌は、雄の美しい色や鳴き声・発達した角、触覚などに強く気を惹かれ、特に気に入った相手とでなければ身を許さない傾

向にある。これを「性淘汰」と呼び、選ばれた雄は、その形質を子孫に強く伝えていくが、選ばれなかった雄は、子孫を残す事はできず、自ずと淘汰される事になる。今時、選ばれなかった人間の男が女を殺すなど、動物以下だ。

一般的に進化というものは、環境の激変などにうまく変身して適応し、悪環境を乗り越えて子孫を残すが、種の維持を目的とするとは限らない。進化とは合目的に変化していくものではなく、ランダムに起こる。逆に生存に不利な方向へまっしぐらに進む事もある。例えば、このユーラシア大陸に1万年前まで繁栄した「オオツノシカ」は、枝角の重さが50kg、両角の幅が3・5倍もあり、雄同士が戦いの最中に角が絡み合い、身動きができなくなり、両者が組み合ったまま死亡。或は角が木の枝に絡み、はずれなくなつて、そのまま死亡する事はしばしば。こんな事は、なぜ起きたのか？

それは雌の好みで、より角の大きい雄を選んで交尾を許したからである。クジャクの雄の尾羽は正に生存に不向き。しかし雌の好みで雄は生存に不向きであっても大きな尾羽に特化していった。

雌の好みで、その生物は生存に有利であろうがなからうが、進化の方向性が決まる。

人類も長い狩猟採集時代、より多くの獲物を運んで来る雄を雌は好み、身を許す。即ち体力・知能の優れた雄（その子孫は700万年間に身長が1.8m、脳容積が3倍増加）を、他の雌に横取りされぬよう排卵期でもないのに、しかも妊娠中でさえも強い雄を留め置いたため「性」で縛る。結果として世の中に強い雄が多くなれば、強い者同士が覇を競い争いが絶えない。即ち戦争の絶えない人類とい

う生物がはびこり、国際法無視、架空国家の名のもとにテロ、原水爆蓄積の愚行など人類滅亡への一里塚のように見える。

今生きている生物の全ては、環境の激変や後世は雌の選択に勝ち抜いた者達の子孫である。事実カンブリア紀以降、直近5億年間に、海底火山爆発などにより全生物の9割近い絶滅事件は、5回もあったという。それゆえ産業革命以降、地球温暖化など人為的な環境破壊が進み、第6の大量絶滅を招くような『愚行』を起こしてはならないなどと、警告が発せられている。

「矮雄」など例外を除けば、大方の雌は体の大きい雄を好み、大きい雄は、種としても大型化に繋がる。大型化した動物は、必須アミノ酸などが、満足にバランスよく摂取できず、滅亡（北米大陸で進化した馬が北米で滅亡。ユーラシアに渡り繁栄、していく傾向が見られる。

雄はどんなに威張ってみても、雌に好まれなければ子孫は残せない。進化の方向性は、生存に有利だけではなく、良くても悪くても、雌に好まれる雄が子孫を多く残す事になる。



風と戯れて

木下明男

午後の微睡み
静な昼下がり 風が 香りを運んで…



風はこぼ
コーヒーの香り
蝉の声

銷想

漢詩に銷暑と云うことばがある、恨み辛みを超越する、銷想と云うことばを…



静かなり
いつもの景色
蝉の声

鬼灯

猛暑がひと息 鬼灯の花に 初秋を感じて感謝



鬼灯に
朝の涼しさ
ありがとう

激しく…

過ぎ行く夏を 惜しむような 激しさ



ゆく夏を
惜しむように
ミンミンと

蝉嵐

激しかった嵐去り あとにやってきた 嵐のよ
うな蝉の鳴き声



嵐去り
勢い増した
蝉嵐

武士の人格

打田昇三

人間の隠れた資質を任命時に調べるのも難しい
とは思うが、近頃は選ばれた立派な方々が起こす
愚かな行動が目につく。一般には余り知られてい
ないけれども、身分の上下が有った時代に筋を通
して出処進退が潔かった(いさぎよかった)人物の話
が伝わっているので紹介をしておく。

源頼朝の挙兵時にいち早く源氏方へ駆け付けた
天野藤内遠景(「藤系豪族」は、伊豆で頼朝の殺害を
図った伊東祐親が船で逃げようとしたのを捕らえ
た武士である。その子孫は伊豆から三河国に移っ
ていたようで天野三郎兵衛尉康景も、父親が徳川
広忠(家康の父)に従い、自分も幼少時から家康の

身近に仕えていた。

後に駿河国與国寺城（沼津近辺）を預けられていたのだが、慶長十二年（一六〇七）旧暦三月九日の夜に折から風雨の激しい中を息子の対馬守康宗と共に城を出て行方知れずとなった。

其の頃、天野康景は城とは別に自分の居宅を建てようと材木を買って置いた。是を夜ごとに盗賊が出没して盗んでゆくので家臣に見張りをさせて居たところ、盗賊が集団で来たため、家臣は刀を抜いて追い払った。其の時に抵抗した何人かの盗賊が斬られて負傷した。実は此の盗賊は富士山麓の幕府直轄領に住む村人であった。

「盗人猛々しい」というが、此の村人は怪我を喧嘩の所為にして代官に訴えた。真相を知らない代官は與国寺城に使者を出して「徳川家康公の領地住民に怪我をさせた不届者を差し出すように」言ってきた。当然だが康景は「住民では無く強盗を斬ったのである」と拒否をした。

其の俣では強盗に分類されてしまう村人は苦し紛れと言うか卑怯にも、江戸城から駿府城へ帰る途中の家康を待つて直訴をした。家康は駿府城に戻ってから側近の本多正純に「康景は、理由も無く人を斬るような者では無い。何か事情が有るらしいから調べるように…」命じた。

正純は康景を訪ねて「事情は推察できるが、是を明きらかにすれば家康公の領民が犯人となり、神君の御名に傷がつく…此処は大義の為に、貴殿の足輕に犠牲となつて貰いたい…」と懇願をした。

康景は「如何に身分の低い者でも事実を曲げて罪の無い家臣を犯人にすることは出来ない。しかし私の行為が御政道の妨げとなるのであれば此の身で罰を受ける…」と言い切った。正純は仕方な

く駿府に戻つたけれども、その後で康景は息子と共に城を出てしまった。

此の康景は、徳川家康が六歳で今川義元の人質となつていた頃から（自分も少年の身で）家康に従つていた人物であり、後に三河国が家康のものとなつた時に初めて三奉行が置かれた中で「仏（慈悲深い）高力（与左衛門清長、鬼（規律厳正な）作左（本多作左衛門重次、どへん無し（公平無私）の天野三郎兵衛）」と地元で謳われたほどの立派な人物なのである。

家臣一人を犠牲にすれば済むところを人間として筋を通す為に自ら出世街道を外れて野に下つた天野三郎兵衛尉康景は、小田原の西念寺という寺に隠通していたが慶長十八年（一六一三）二月に七十八歳で世を去つた。それから十五年程経つて寛永五年に息子の康宗と康勝は幕府に召し出され、二年後には弟の康世も幕臣となる事が出来た。天野康景の行動は、一人の罪無き者を救う為に万石の城を捨てた義挙として後世に伝えられる。

日々に拾つた言葉達

白井啓治

文章を書きませんか、とお誘いすると、殆どの人が「文章を書くなんて難しくてできません」と断られてしまう。何故文章を書くのが難しいと思つてしまうのだろうか。これはおそらく小学校・中学校での国語の授業に問題があるのだろう。

文章と聞くと直ぐに上手・下手を思つてしまうようであるが、自分を表現する文章には上手・下手は存在しないのである。読みづらい文章だな、回りくどい文章だな、ということはある。しかしそれは書く人の個性なのである。

学校では、言葉の意味や文法のこと等を学ぶのであるが、言葉の意味や文法に間違いがなければ、それは立派な文章である。表現が回りくどいからと言つて下手な文章だという事はない。

新人賞の選考審査の時に、文章がうまいとか下手だとかという事を考えたことはありませんよ、と言ふと皆さん「へっ？？」と言ふ顔をされる。新人作家として望まれる姿は、文章の上手い下手ではなく、書かれた文章に現状を、あるいは既成を突き破る力をどれくらい持っているかであり、それを問われるのである。

ある作家が、あるテーマを表現するために、全文を平仮名で書き、しかも句読点を一切つけないで書いたことがあつた。非常に読みづらいものであつたが、読後、そのテーマを表現するにはこの表現方法しかないな、と納得させられたことがあつた。学校での作文で、これを提出したら間違いなく落第点をもらうことだろう。習つた漢字を使い、確りと句読点を打つていないからである。

しかし、これは下手な文章という事ではない。当風の会の打田兄は、「文章で自分を表現できるのは人間だけなのだから、文章を書くのはイヤダと言う人は人間を放棄したことになる」と集まりの時によく話される。小生もその意見には賛成である。

さて文章を書くのが苦手と話される人の多くは上手下手を思い、言葉を表現することに構えてしまふと言ふ。その時、私はこう思つた、こう感じたとか書くのに上手下手はないのである。自分がこう思つたという事に上手下手があるとしたら、人間生きていく隙間がなくなつてしまふ。

人の喜怒哀楽を表現してくれる言葉は、日常の

つまり「物怪(もっけ)」の話であるが善意に解釈すれば、是から始まる平家滅亡の長い過程を物語る悲劇の予告編と言えないこともないから、怪しまずに読んで頂くしかない。

さて強引な手法で福原に都を遷して以来、憎まれ口で言えば平家に碌なことは無かった。全員では無いと思うが平家の者たちは毎夜のように嫌な夢ばかり見て何となく心が晴れず、サービスとして妖怪変化が様々な趣向を凝らし恐怖心を植え付けてくれた。毎夜に同じ出し物では見るほうも飽きるから、驚かす妖怪のほうもメニューを考えるのが大変であった。妖怪たちが演技で悩んでいる頃、遠く離れた関東では既に源頼朝の反平家運動が実行に移されていて治承四年(一一八〇)旧暦八月十七日には平家一門に連なる伊豆の代官・山木兼隆を襲撃しているのだが、其の情報は未だ平家に届いていない。平家の、こういう状態を「胸騒ぎ」などと言うのかも知れない。

半信半疑の状態で本題に入ると、或る夜、清盛入道が寝ている部屋に、大き過ぎて入り切れないような顔だけの怪物が現れて室内を覗き込んでいた…と原本に書いてあるが、どう考えても「そうですか…」とは言えない。幻覚で誰かに覗き見られたような気がしたのであろう。清盛は驚かず、幻の怪物を睨(にら)みつけた。そのパワーに負けたようで「デカイ顔の怪物」は消えてしまった。その屋敷は「岡の御所」と呼ばれる新造の屋敷であるから回りには大きな樹木なども無かったのであるが、或る夜には大木の倒れるような音がして二、三十人の者が笑うような声も聞こえた。

その様な不可解な出来事に対して誰が言い出したのか「是はどう考えても天狗の仕業であろう」と言

うことになり、魔除けに用いる臺目(ひきめ)音の出る矢を射る者を集め夜は百人、昼は五十人を配置した。この番人たちが怪しいと感じて矢を放つと天狗が居たと思われる方角に飛ばせば静かだが、居ない方角だと生意気に笑ったりする。

また或る朝には清盛入道が寝所から出て戸を開けたところ中庭に無数の頭蓋骨が集合していて、それが生きた人間のように遊び回り転げ回っていて手が付けられない。さすがの入道も呆れて「誰か居るか!」と家臣を呼んだけれども近くには誰も居なくて来る者が居ない。そのうちに無数の髑髏(どくろ)が一つの塊になったから、高さ五十メートル程の特大頭蓋骨が出来上がった。其処に眼球が無数に出来て清盛入道を一斉に睨んだ。然し入道は少しも騒がずに其の目玉軍団を睨み返したので霜や朝露が太陽に当たって消えるように跡形も無く消え失せてしまった。

怪しい出来事は其れだけでは無い。平家屋敷での厩(うまや)と言つて最上等の名馬を繋いで置く厩舎に、大勢の要員を付けて大切にしていた馬の尾に、一夜にして鼠が巣をつくり、子ネズミが生まれていた。是は只、ことでは無いと、七人の陰陽師(おんようじ)占いに診察?させたところ決まり文句で「重い御慎み」と言つた―他に言うセリフが無いのか!此の馬は相模国の住人・大場三郎景親が関東八か国第一の馬として入道相国に献上したもので、黒馬で額(ひたい)だけが白いところから「望月」と名付けられていた。

平家物語には書いて無いが、この大庭景親と言う人物は常陸国に土着した平国香の末弟・良文の子孫であり曾祖父が、源氏に仕えて後三年の役で眼を射られながら矢を抜かずに戦った勇将・鎌倉権五郎景

正である。梶原景時とは従兄弟になる。景時が早くから頼朝に従つたのに、景親は最後まで頼朝に抵抗していて斬られた。

話を戻すと、名馬の尾に鼠が巣食つた事件で七人の陰陽師が良くない占いをしたので、何とかしたい平家は陰陽師の親分である陰陽頭の安倍泰親にも診察?をさせたのだが、泰親も返事の仕様が無い。其の昔、天智天皇の時代に宮中の馬寮にいた名馬の尾に鼠が巣食つたときには朝鮮半島で新羅国が、日本の同盟国である高麗国を襲つた、と日本書紀に記録が有る―と答えるしかなかった。

怪しい話が続くけれども、次の章段では伊豆に流されていた源頼朝が「平家打倒」の兵を挙げるから、平家物語の作者もあれこれと苦勞をして平家が倒産寸前であることを釈明している。

その頃、前年に起こつた(平清盛が起こした)政変により職を失つた源中納言雅頼に仕えていた下級武士が見た夢も恐ろしかった。詳しく説明すると(どうでも良い話だが、原本に従う)宮中の神祇官庁舎(祭典と神職を管轄する役所)と思われる場所に宮中での礼装をした高級公家が大勢、集まって会議を開いていたところ、末席に居たのだが平家に味方をするらしい人物が追いついてしまった。夢を見た武士が「あの方はどういう方なのですか?」と年配の公家に質問したところ、「あれは(平家が信仰する)厳島の大明神…」と答えた。その後上席に居た気高い感じの公家が「是までは平家に預けて置いた節刀(せつとう)賊の征伐に向かう將軍に対して天皇が預ける刀」を今後は伊豆国の流人である源頼朝に授ける」と仰せになられた。すると近くに居た公家が「其の後は私の孫にも与えて下さい」と願っているの、夢の中ではあるが気になつて順々に伺つたところ「節刀を頼朝に!」と言われた

のが八幡大菩薩、

其の後は私の孫に！と言われたのが春日大明神でかく言う私は石清水八幡宮に併祀される武内宿禰である…」と説明してくれた。

夢を見た武士は、夢でも公然とは言えない内容なので密かに知人に相談をした。この情報が漏れて清盛の耳に達したから、平家方の源大夫判官秀貞という武士から中納言雅頼に対して、夢を見た武士の呼び出しが掛けられた。褒められる内容では無いから夢を見た武士は行方をくらまし、主人の中納言は清盛の許に行つて「全くの作り事で、その様な事実は有りません」と釈明をした。清盛も深くは追求しなかつたけれども、夢に暗示されたように、平家が厳島神社から授けられていた長刀（柄を銀で巻いた）がなくなつてしまつた。

此の長刀は、平清盛が未だ安芸守であつた頃に、厳島神社に参詣して霊夢により授けられたもので清盛が枕許に置いていたのだが、平家は朝廷を守護する任務を放棄して勅命に背く行為を繰り返したのであるから、神仏から預けられた物が無くなつても仕方がない。心細いことである。

その頃、高野山に籠つていた藤原成頼は、それらの話を伝え聞いて次のように言つた。この人は巻三の「城南之離宮」で平家の専横を嫌い高野山で僧となり「智成」と名乗つていたのである。

「…これで、ようやく平家の世が終りに近づいたのであろう。（神仏に見放されたのであろう）厳島大明神が平家を護つて来られたのは理由の有ること（巻三・大塔建立）平清盛が社殿を修築したことに対する褒美のようなものである。厳島の神は女神（第一の祭神が童宮城の姫）なのであるから源中納言雅頼卿の家来が夢に見たように、八幡大菩薩が節刀を源頼朝に与え

ると言われたのは（武門の頭領が、平氏から源氏に移る、というの）道理なのであろう…それにしても藤原氏の氏神である春日大明神が―源氏の後は我が孫にも―と言われたのは不思議である。源氏が滅びた後は大織冠（たいしよくかん＝藤原鎌足）の子孫で摂政関白になる家の者が天下の將軍になる、ということなのであろうか？」

藤原成頼に言わせているが、源氏の後の將軍には実際に藤原氏が充てられて、北条氏が権力を握つていたのであるから歴史には合致している。

原本に戻すと、その折に高野山を訪れた在る僧が「神仏が顕される衆生救済の奇跡はまぢまぢであり、或る時は人間の形で、或る時は女神にもなつて現れ給う。誠に厳島の大明神は女神であられるが、明智に優れた神なので、容易に人間の形をされて人の善悪を見分けておられる―心せねばなるまい」と言つた。煩わしい此の世から引退して仏道に精進すると、後世菩提の他は世の営みが無くなるけれども、それでも良い政治が行われれば感心し、悪い行いを聞けば悲しくなる。是は人間の習性であるから避けることは出来ない。

説教じみた此の章段は終り、平家にはいよいよ風雲急を告げる事態が待っている。

早馬（はやうま）のこと

文字通り風を切るように疾走する馬が早馬であるが燃料の無駄になるから、やたらと使えない。通信手段が無かつた時代に緊急事態を報じる使者が命懸けで駆け付けて来るのが早馬であり、此の場合は前の章段で登場した相模国（鎌倉近辺）の大庭三郎景親

が、福原の平家屋敷まで使者を飛ばした。何しろ急いでいたから手紙もメモ程度で、使者が口上を述べたのであろう。出発日は不明だが到着したのは九月二日、息も絶え絶えな使者が告げたのは次の様な情報である。

去る八月十七日に、伊豆国の流人であつた前右兵衛佐（さきのうひょうえのすけ＝禁中警護に当たる中将級の官職）源頼朝が、舅（しゅうと）の北条時政を派遣して伊豆の目代（平家が私的に任命していた役人）和泉判官兼高を襲わせ、山木の館で夜討ちにした。その後、頼朝に味方する土肥次郎実平、土屋三郎宗遠、岡崎四郎義実を始めとして三百余騎が石橋山（小田原市外、相模湾に臨む丘陵地帯）に立て籠つた。

是に対して大庭景親が志を同じくする平家方に付く近隣の武士たち一千余騎を率いて押し寄せたために、頼朝方は必死で抵抗したけれども、七、八騎を残すばかりに大敗して箱根に続く山中に逃げ込んだ。その後、平家方には畠山二郎重忠が五百余騎で加わつた。

一方、平氏系で三浦半島に居た三浦大介義明の子供たち三百余騎が源氏に付いて、鎌倉南部の由井、小坪などの浦々で戦つたところ、畠山が負けて武蔵国へ退いた。それから畠山は一族の河越太郎重頼、稲毛三郎重成、小山田別当有重、江戸太郎重長、葛西三郎清重など武蔵七党の兵、一千余騎を結集して三浦半島（横須賀）の衣笠城に押し寄せて攻防戦を展開した。この合戦で三浦大介が討たれた為に三浦一族は久里浜から船で安房・上総（房総半島）に向かつた…。

この段階では、蜂起した「反平家」勢力の大部分が地元の武士団に抑えられて源頼朝も行方不明なのではあるが、平家一門にとっては思いも掛けなかつ

た出来事であったから精神的なショックが大きく福原遷都も興ざめの状態になった。尤も、平家一門の、いわゆる「戦争を知らない若い世代の者たち」は「大事が到来したようなので討手に向かおう！」などと言っていたが、それもカラ元気で虚しいことである。

その頃、東国の武士で武蔵の畠山庄司重能、弟の小山田別当有重、下野の宇都宮左衛門朝綱らは平家に命じられて皇居警護の大番役として福原に居り事件の話を耳にした。一同が集まって噂をした中で、

畠山は「多分、この話は嘘で有ろう：北条は娘が頼朝と一緒にたつたと聞いたから分らないが、今の時点で朝敵となる（安徳天皇を擁する平家に背く）武士は居ないであろう。この噂は良く確かめた方がよい：」
と言ひ、その意見に同調する者と「いや、いや、是は天下の大事になるであろう：」と声を落とす物も多かった。

事件発生の第一報しか無いので所詮は「カラ騒ぎ」になるけれども、平清盛の怒りは激しく「頼朝は死罪になすべきところ、故・池殿（清盛の継母・平忠盛の後妻が、あまりに不憫（ふびん）に思われて嘆願をされたので、死一等を減じて伊豆へ流罪にした。それなのに、恩を忘れて平家に弓を引く（反乱を起す）とは何たることか！是は慈悲深い神仏であっても、お許しにならない反逆行為であるから、必ずや天罰を受けるであろう！」と、繰り返し叫んでいた。源平盛衰記や日本外史では「盗賊に鍵を貸したようなもの：」と怒っていた、と書かれているが、天罰は兎も角「地罰」ぐらいは受けそうな平家の行いに反発が有ったの頼朝の決起（地方の反発）である。

そもそも源頼朝が伊豆に流されたのが永暦元年（一一六〇）三月十一日であり、以仁王の令旨を受け

て挙兵したのが治承四年（一一八〇）八月十七日であるから丸々二十年が経っている。清盛の怒りも分らないでは無いが、二十年経てば時代も世の中も大きく変わる。何よりも平家物語は冒頭に「諸行無常」を謳（うた）っているのであるから清盛には諦めて貰うしかない。

朝敵揃（ちようてきそろそろ）のこと

「勝てば官軍負ければ賊軍」という公式？があるらしいが、この章段は時代時代の権力に抵抗して挫折或いは目的が成就しなかった人物たちの名前を冒頭に挙げており、言うなれば今回の伊豆挙兵（源頼朝の平家に対する抵抗）も、その部類であるような言い方をしている。結果的には、一旦は敗北した源氏軍（頼朝を盟主と仰ぐ反平家軍）は房総半島で勢力を得て、遂に平家を滅亡に追い込む訳であり、その途中から朝敵の座？が交代してしまうのである。平家物語の作者は話の進展上で「官軍＝正義」を平家にしたり、源氏にしたり、微妙に表現を変えなければならなかった。その苦勞を、かつて朝敵と呼ばれた人々の名を列記することで、はぐらかしている。

日本の歴史で「朝敵（天皇に対する反抗）」の最初とされる出来事を探してみると、神日本磐余彦尊（かむやまといわれびこのみこと＝神武天皇）の四年、紀州名草郡高雄村に「土蜘蛛（つちぐも）」と称する抵抗勢力が居た。身体は小さくて手足が長く力が有った。人民を苦しめていたので、官軍を差し向け、天皇名義の降伏勧告文書を読んで聞かせ、言うことを聞かなかったため蔓（つる）で編んだ網で捕らえて殺害した。大陸から侵略してきた勢力が日本列島を支配する過程での

出来事であるから一方的に官軍・賊軍に区別は出来ないけれども昭和二十年までの誤った日本史では、其の様な幼稚な嘘を教えていた「神武天皇以来、野心を持つて天皇の權威を犯そうとした（争いに敗れて朝敵とされた）のは次のような者たちである。

- ・大石小麿＝雄略天皇十三年、旅人を苦しめていた海賊で、春日の小野大樹に退治された。
- ・大山守皇子＝應神天皇の子、仁徳天皇と皇位を争って敗れた。
- ・守屋の大臣＝用明天皇の没後に蘇我氏との皇位継承争いで敗れ、滅ぼされた。
- ・蘇我倉山田石川麻呂＝蘇我馬子の孫で大化の改新の功勞者、異母弟に陥れられた。
- ・蘇我入鹿＝そののいるか、權勢を誇ったが中大兄皇子（天智天皇）と藤原鎌足に滅ぼされた。
- ・平群真鳥＝へぐりのまとり、平群氏は孝元天皇の子孫、仁賢天皇代に權力を振るつたが天皇の死後、大伴氏に滅ぼされた。
- ・文屋宮田＝ふんやのみやた（天武天皇の末裔）公卿として仁明天皇に仕えていたが謀反を企み、家臣に密告されて東国に流された。
- ・橘逸成＝聖武天皇時代の左大臣・橘諸兄の曾孫であるが嵯峨天皇の崩御に際しての謀叛で流罪
- ・氷上川継＝ひかみのかわつぐ（天武天皇曾孫）天智天皇系の桓武天皇即位に反対しての謀叛と思われる事件で伊豆に流罪
- ・伊予親王（桓武天皇の第三皇子）＝桓武天皇の死後、平城天皇と愛人・藤原菓子の策謀と思える無実の罪で謀反として自殺させられた。
- ・藤原広嗣（常陸国府に勤務した藤原宇合の子）＝太宰府に赴任中、政權を握る玄坊らに對抗して反旗を翻し、討伐された。

・惠美押勝（藤原仲麻呂）Ⅱ弓削道鏡との権力争いに敗れ、謀反を企てて誅された。

・早良（さわら）太子（桓武天皇の弟）Ⅱ始め、皇太子に立てられたが、平安京遷都に伴う反対派の事件に関わったとされて流罪途中で死亡、

死後、鎮魂のため「崇道天皇」と号された。

・井上皇后（聖武天皇皇女・光仁天皇皇后）Ⅱ藤原氏の策謀により天皇呪祖の罪で廃された。この事件により桓武天皇即位が実現した。

・藤原仲成Ⅱ妹の藤原菓子と共に平城天皇に取り入って国政を乱し、嵯峨上皇に誅された。

・平将門、藤原純友、源義親、藤原信頼Ⅱこの四人については「平家物語」巻第一（祇園精舎の冒頭）に逆臣として挙げられている。

然しながら、その評価は権力者の側からのものであるから現代的に

は一概に悪とは言い切れない。特に平将門については、当時の記録である「将門記」の解説が容易になったことから明治の文豪・幸田露伴を初めとして多くの研究者が、その功罪を見直しておられる。平家物語の記述は、飽くまでも鎌倉時代初期の歴史観としての評価である。

…それはそれとして、この項目は「朝敵揃」であるから名前を挙げられた二十四人は、一人として本望を遂げることなく「屍（かばね）」を山野に晒され首は獄門（見せ物）になった」としている。

近頃は（平家の専横も有って）天皇の威光が軽くなつてしまつたが、昔は相手に対して宣旨（天皇の言葉を読めば枯木も花咲き実がなり、飛ぶ鳥も落ちると言われた程に権威が有つたもので醍醐天皇が御苑で鷲（さぎ）を見掛け、六位（天皇側近の従者で身分の低い者に「あの鷲を捕獲して参れ！」と命じた。六位の

者は、どの様にして捕えるか迷つたが、鷲の近くに寄り「宣旨である」と声を掛けたところ、鷲は飛び去らずに地面に平伏していた。六位は、その鷲を捉えて天皇に献じたところ、天皇は「六位が伝えたる宣旨に従つた鷲は神妙である…此の鷲に五位の位階を与えよ」と言われた。それにより鷲は頸に「鷲の中の王」という札を付けて放され「五位鷲」になった、と言う、詐欺のようなお粗末な一席…多分、其の時の鷲は怪我でもしていて、急には飛び立てずにいたのであろう。此の時に、醍醐天皇は鷲を狩りの対象にしたのでは無く、ただ、王位を示したかったのである—と平家物語は結んでいる。

平家物語も商売上手で、と言うよりも、栄耀栄華を極めた平家が源朝の出現によつて一気に没落してゆくことに後々めださを感じたのかうか言うなれば因果応報のコマーシャルのような内容を入れているから、華々しい源平合戦の場面が中々出て来ない。今少しお待ち頂きたい。

次は例によつて中国の話が長々と続き、さらに源頼朝の決起に影響を与えたとする「文学（武士上りの僧）」の話になる。平家物語は余程、義理難い人物が編集したようであり、一つの出来事を紹介するのに事情説明が長過ぎるのが欠点であるが昔のことであるから、あれこれと氣使いが必要であつた…とご理解頂ければ幸いである。（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく（はげしく）心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。 月1回コース（受講料：¥6000 円） 2回コース（受講料：¥9000 円）

連絡先 080-3125-1307（白井）